



『ピアノ～ウクライナの尊厳を守る闘い』を観て

池田光良・氏間多伊子・小笠原正明・川染雅嗣・徳田貴子

《緊急座談会》日本初公開の本作を動画配信サービスから購入・視聴し感想をシェアしました。「アジアンドキュメンタリーズ」*単品購入 視聴期限7日間〈ウクライナ緊急支援企画/視聴料寄付プロジェクト〉

ウクライナでの戦争

氏間:2022年2月24日、ロシア軍のウクライナ侵攻が世界中を震撼させました！この出来事をみなさんはどう受け止められましたか？

川染:侵攻の前から、ロシア軍がウクライナとの国境付近に集結しているというニュースに、なんだかキナ臭い印象を抱いていましたが、まさか本当に侵攻するとは驚き以外の何ものでもありません。政治的な解決方法は本当になかったのかという思いです。大変不謹慎な話ですが、ロシアのウクライナ侵攻の際を突いて北方領土を奪い返してしまえば良いとさえ、一瞬思っていました(笑)。

また、2020年2月に北イタリアにある昭和音楽大学の研修所にピアノの学生たちを連れて参りましたとき、室内楽の助演をお願いしたチェリストが、カティヤというウクライナからの留学生でした。彼女はイタリアの音楽院で教鞭をとる、ある高名なロシア人チェリストに師事するべくイタリアに来ていました。若いながらも素晴らしい演奏家で、拙い学生たちの演奏にも根気強く向き合ってくれました。ウクライナ侵攻のニュースを聞いてすぐに思い浮かんだのは彼女のことでした。カティヤはどうしているだろう、ウクライナに戻ってこの騒動に巻き込まれてはいないだろうか、と。

徳田:私はアナスタシヤというウクライナ出身のピアニストのことが真っ先に思い浮かびました。2014年クリミア併合の当時マイアミ大学の博士課程にいて、彼女からウクライナの状況を聞いていたんです。ハルキウ(ハリコフ)に住む彼女のご家族のことや、アメリカにいる同僚の気持ちを考えると、とても他人事とは思えず胸が張り裂ける思いです。

映像の中のウクライナ

氏間:映画では、多くの音楽家が地下シェルターから演奏風景の動画を配信していました。芸術や文

化遺産が無残に破壊され命の危機と向き合っている現状に、何かできないかと途方に暮れます。

普段から何本も映画をご覧になっている池田さんはいかがですか？

池田:いやな予感が当たってしまい残念です。というのは本作を見る前に、ウクライナ・スターリニズムに関する映画『赤い闇』、『DAU.』シリーズなどを6本見たり、スターリンを批判して投獄されたのち、1962年にノーベル賞を受賞したロシアの理論物理学者レフ・ランダウに関する本を5冊読んだりして、ウクライナの状況を危惧していましたから。

氏間:すごい情報収集量ですね！8年前に自由と尊厳のため立ち上がったウクライナがよくわかる映像が今回緊急配信されたのでシェアしました！

ロシアやポーランドにご滞在経験のある小笠原さんはご覧になっていかがでしたか？

小笠原:マイダン革命のきっかけとなった2013年のキーウ(キエフ)独立広場のデモを、私はロシアで見ました。12月に1週間ユジノサハリンスクに滞在しているあいだホテルのテレビはこの騒動を報道し続け、ロシア人は騒動が長引いているのはNATO 諸国によるデモ隊支援のせいだと非難していました。遠いウクライナでの事件の映像はいつも遠景で、独立広場のデモ隊のたき火と背景の黒い建物のシルエットだけが記憶に残っています。

映画『ピアノ』は翌2014年2月に起こった革命をウクライナ側から描いていますが、ロシアのテレビ映像と比べて格段に色彩豊かで、登場人物ひとり一人の言葉や表情からその人の生き方が伝わってくるのが印象的です。人々が内的動機に基づいて、それぞれのやり方で運動に係わっていることがよくわかります。この2つの映像は基本的に同じ事件を違う視点から描いたものですが、そのあいだに存在する断絶の深さは、日本という「安全圏」にいる私たちの想像を超えています。

ポーランドの人々

氏間:ポーランドにご友人も多いと思いますが、何かお聞きになっていますか？

小笠原:ウクライナ避難民に対するポーランド人のホスピタリティーには感動します。テレビ報道でよく見る、国境の町メディカの避難民の長い列は、私自身1980年のポーランドの「連帯革命」のとき食料品売り場で経験した行列とよく似ています。繰り返し同じような経験をしてきた民族として、ポーランド人は避難民に降りかかった災難を他人事とは思えないのでしょう。

私のポーランドの友人はこの2年間コロナ禍を避けて郊外のコテージに住んでいます。いまはウッチの本宅を8人のウクライナからの避難民(うち2人は子供)に提供しているそうです。両民族は精神的にシームレスにつながっていますね。

「革命」エチュード

氏間:徳田さんは視聴されていかがでしたか？

徳田:音楽のパワーに改めて圧倒されました。人々の気持ちに訴えかける力、それをつなぐ力、恐怖さえも消し去る力を場面から感じました。

21世紀の今、ショパンの「革命」エチュードが、なぜコンサートホールではなく、焼け焦げたバスの上の不安定なステージで演奏されるのかと、衝撃を受けました。ショパンをはじめ当時の作曲家たちが、悲惨な歴史に翻弄され悲しみに暮れる人々の気持ちを十分に表現し後世に伝えてくれているのに、なぜ再び同じ底なしの悲しみが今起こるのだろうと、息が詰まる思いでした。

川染:私はこの映画のことは今回初めて知りました。アントワネットがショパンの「革命」を弾くシーンはショパン自身のエピソードを彷彿とさせ、彼女の姿を借りてショパンが姿を現したかのようにみえます。政府が大音響で流す「ロシアンポップスにはベートーヴェンで勝負よ！」と叫ぶシーンも痛快ですね。しかしなんととっても印象的なのは、広場に置かれたピアノで最初に弾いた曲はウクライナ国歌、ということなんです。この革命が国の命運を左右することの象徴ではないでしょうか。

関連作品 (日本、シリアほか)

池田:この映画は短編ながら平和への希求がよく描かれている秀作です。ピアノの修復から演奏にいたる物語には感銘を受けました。これは黒澤明監督の名作『八月の狂詩曲(ラプソディー)』(1991)

で壊れたオルガンを修理してシューベルトの『野ばら』を演奏するシーンと重なります。楽器の修復は平和の回復への祈りを象徴しています。また、被爆者追悼の般若心経の流れる中、蟻が赤いバラを登っていく素晴らしいシーンもあります。最後に主人公の「おばあちゃん」が傘をオチョコにしながら嵐の中を進んでいくシーンに『野ばら』が重なり、原爆で焼けただれた聖母マリア像の場面やエンディングにヴィヴァルディの『スターバト・マーテル』の『母は悲しみにありき』が流れます。これらのシーンが黒澤作品を名作にしています。

氏間:聖母像は覚えてます！長崎が舞台でリチャード・ギアも登場しましたね(笑)。確かにオルガンの修復と選曲には平和への祈りと強い平和願望が感じられますね。

川染さんは後半の『ピアノ』の修復の場面をどうご覧になりましたか？

川染:ピアノを修理した後、夜遅くに試弾していると男が苦情を言うてくる場面は、全ての市民がピアノを軸に団結しているわけではないこと、音楽が持つ力は絶対ではないことも示しています。また、アントワネットに罵詈雑言を浴びせるテント村の男たちは何者でしょう。中には肘から先を失った男もいます。彼らは市民とも、義勇兵とも、機動隊とも違った空気感を持っています。ウクライナに広まっているというネオナチの連中でしょうか。彼らも音楽やピアノには全く関心がありません。

氏間:そうですね。いたるところでアントワネットのいじらしさと不屈の精神力が垣間見えます。彼女が泣き出してしまふのはとハラハラしました。

さらにおススメの作品に『ウィンター・オン・ファイヤー〜ウクライナ自由への闘い』*(2015)という同じマイダン革命93日間の記録映画があります。そこにもアントワネットがショパンの「革命」を弾く場面が写っているんですが、その時は妨害の騒音はないですね。音処理か？別の日の演奏か？…

ほかに『娘は戦場で生まれた』(2019)は内戦に揺れるシリアのアレッポの惨状をとらえています。母となった若い女性が自らカメラを回し続けた緊迫のドキュメンタリーです。アレッポといえばオリーブの石鹸で有名ですね。現在のウクライナ・マリウポリの壊滅状態はアレッポと全く同じです。

『ピアノ』

ところで、『ピアノ』で一番印象に残ったのはどこですか？

* <https://youtu.be/yZNxLzFfR5w>

小笠原:この映画の主役は、幅わずか70メートルの機動隊とデモ隊との緩衝地帯に置かれた古ぼけたピアノです。あの場で国歌「ウクライナの栄光は滅びず」を歌った人々はその時の感動を一生忘れないでしょう。私も、いまにも崩れ落ちそうなステージ上で演奏されたショパンの曲ほど魂を揺さぶるものはないと感じました。人々がピアノを囲んで楽しげに歌っていたウクライナの音楽は、私の好きなロシア民謡と驚くほどよく似ています。

機動隊側は妨害のため大音量の音楽を流しますが、そのこと自体、ピアノの音が、どちら側に属するにせよ、その場に居あわせた人々の心を強く捉えていたことを雄弁に物語っています。おそらくそれが、この映画における唯一の救いであり、製作者のいちばん訴えたかったことだと思います。

川染:冒頭のレッスンシーンが印象的でした。演奏曲は知りませんでしたが、技術ではなく心で弾くレッスンですね。どこのメーカーのピアノか分かりませんが、ペダルが2本しかないので相当古いものに違いありません。また、レッスンの場所があまりにも殺風景で驚きました。これで思い出すのはワルシャワ音楽院の劣悪な練習室の有様です。そもそも練習室の数が少なく、学生たちはありとあらゆる手段を講じて練習室を確保していました。

ほかに妻と生まれたばかりの子供を亡くした覆面の男が語るシーンは深く心に響きました。彼はマイケル・ナイマンの曲と思しき作品を弾いていました。ナイマンといえば『ピアノ・レッスン The Piano』*(1993)です。この映画の悲劇的な結末と、覆面の男の不幸が重なり合って、観るのが辛いシーンでした。
* https://youtu.be/hWiYl_5WCeY

徳田:私も覆面の男ボーデンが今は亡き戦友を想って作曲したという曲の演奏場面に心打たれましたね。ハーモニーが移り変わるごとに広がる響きの中に、言葉では言い表されない、逃れられない運命、悲しみ、孤独があふれていました。

氏間:私も覆面の元ピアニストの言葉にはぐっときました。「彼はそこで殺された。ひどい死に様だった。昨夜彼の夢を見た。彼はこう言った。“どんなことも受け入れるが、あんな無様な死に方はイ

ヤだ”彼が死んだ時こう感じたんだ。まるで背中の壁が崩れるかのように彼は死んだ。それでおしまい。俺はもう一人ぼっちなんだ」と。このシーンのこぼれ落ちることばを急いで書き留めました！

池田:確かに壊れたピアノを修理し持ち出すのに非協力的だったテント村の指導者たちとは違って、覆面の元ピアニストのその曲は義勇軍の一兵卒たちの心にも響く良い曲だったと思います。

そして最後に修理されたピアノはトラックに載せられ、どこかに運ばれていきます。まるで希望に向かって進むかのように。

氏間:最後のシーンはピアノを通して多くのことをあぶりだし複雑な感情の余韻を残し、とても豊かな時間を与えてくれますね。

監督のご両親とのご縁

実はつい最近知ったんですが、この作品の監督ビータ・ドリガスさん=写真=のご両親に、なんと2013年6月にお会いしてたんです！東京の「EU フィルムデーズ」のあと札幌にみえて、「ポーランド映画セレクションⅢ」の舞台挨拶、三笠の炭鉱跡地視察、小樽、白老ポロトコタンと3日間ご一緒しました。(ポ文協の公式サイトで POLE78-79 号**をご覧ください！)(笑)

父上のマチェイ・ドリガス監督は1956年ポーランドのウッチ生まれ、81年全ロシア映画大学を卒業後、クシシュトフ・キェシロフスキ監督の助手を務めた方で『私の叫びを聞け』(1991)を、また母上のリトアニア出身の映像作家ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督は『統合失調症』(2001)を携えての来日でした。

両監督は、社会問題、歴史事件をテーマとしつつ、そこに必ず人間の内面の声を響かせ素材を「映像詩」へとまとめ上げていく手腕や歴史に対する誠実さが特徴です。「ポーランドドキュメンタリー派」を代表し国際的に評価の高いご両親の影響は、この作品にも深く感じ取ることができます。

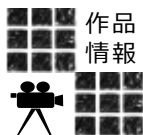
(いけだ・みつよし、うじま・たいこ、おがさわら・まさあき、かわそめ・まさし、とくだ・たかこ)



ビータ ドリガス

監督: Vita Drygas | 2015年 | 41分 | ポーランド | 原題: PIANO

映画祭/受賞歴<年>: MiradasDoc (スペイン) グランプリ<2017>、ヴィルニュス国際映画祭 (リトアニア)・ポーランド映画賞イーグル最優秀ドキュメンタリー賞・パルヌ映画祭 (エストニア)・堤川国際音楽映画祭 (韓国)・モトヴン映画祭 (クロアチア) <以上 2016>、クラクフ映画祭 (ポーランド) <2015>



作品
情報